

第8回「日本語大賞」

テーマ「あまり使いたくない日本語・もっと使いたい日本語」

一般の部 優秀賞 受賞作品

がんばったなあ

兵庫県
阿江 美穂

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

小学校の教師をして二十年目に、永年勤続の表彰をしていただいた。名前の通り、永きにわたって勤めてさえいれば、誰でももらえるものである。

表彰式に出た帰り、そのことを父に報告しようと思家立ち寄った。

そもそも教師をすることになったのは、父の勧めがあったからだ。

短大卒業時、その後の身のふり方を自分では何も決めることのできない娘を見かねて、父が、

「先生にでもならへんか」

と言ったことから、私の教師生活は始まったのだ。

両親は共に教師をしていたが、私たち子ども三人はその姿を知らない。

次男であった父は、長兄が事故で亡くなったときに、家業の卸売り問屋を継ぐためにその職を辞していた。また、母も出産を機に、家庭に入っていたからだ。

それでも、「教師」という仕事が両親の身近にあったから、その職を勧めてくれたのだろう。

だから、私の教師スタートは、「特に夢や理想を抱いてるわけではないけれど、先生にでもなろうか」「他に特技・資格があるわけではないから、先生にしかねない」といった、当時、教師を批判する言葉にあった「でも・しか先生」の、それであった。

しかし、スタートに反して、その仕事は私にとっても合っていた。

子どもたちと考え、話し合い、歌い、走ることの、なんと楽しいことか。また、同僚と子どもや教育について語り、より良い授業について研究する時間の充実は、何物にも代え難かった。

私は、父の勧めで教師になったことなどけろりと忘れ、いっばしの教師気取りで、事あるごとに母に学校での楽しい様子を話してきた。母は、いつもうれしそうに笑いながら聞き、

「あんたは ホンマにええ先生や」

と、手放しで私を誉めた。父は、聞いているのかいないのか、よく分からなかった。

父に、額に入れられた表彰状と鶴の絵が刻まれた時計を見せながら、私は台所にいる母に向かって、

「企業の永年勤続って、旅行券とか金一封が出るらしいよ。こんな紙切れ一枚と時計もらってもしゃあないなあ」

などと、不埒なことを言っていた。

「私は、金一封が良かったなあ」

と言いつつ、いつもと違う父の気配にふり返ると、父は表彰状を見ながら眼鏡を外して涙を拭いていた。

あつと虚を衝かれ、言葉を無くした私に父は一言、

「ようがんばったのう」

と涙声で言った。母は、何度もうなずいた。

実家では、両親に心配をかけたくないから、楽しい話ばかりをしてきたと思うのだが、二人には分かっていたのだろうか。

幼い娘たちが眠るのを待ってから、ノートを見たり学級通信を作ったりする日々。睡眠時

間を削って削って、仕事をしてきた。それに、娘たちの小学校に保護者参加の行事があっても、母親であることを振り捨てて教壇に立つ辛さを何度も乗り越えてきた。

しかし、女性で教師ならそんながんばりは当たり前のことで、あからさまにがんばってまですオーラを発するなんてカッコ悪すぎる。そう思っただけで、がんばりオーラが出そうときには、用心深く自分の心にもふたをしてきた私であつたのに。

その心のふたが、父の「ようがんばったのう」という一言で易々と開いてしまったようだった。

私、ようがんばってきたなあ。

さっきまでの紙切れ一枚は、熱く、重い永年勤続の表彰状として、私の前にあつた。

晴れ晴れとした気もちで実家を後にした私であつたが、ただ一つ、父が涙までしたことが、心に引っかかり続けていた。私の結婚式するときにも泣かなかつた父が、どうして私の永年勤続で泣いたのだろう。

その夜、娘たちとのにぎやかなおしゃべりの後、いつものように仕事机に向かい、改めて表彰状を手にすると、不思議に湧いてくるのは自分のがんばりではなかつた。

湧いてくるのは、ここまで勤めさせてもらえたことへの感謝の気もちばかりだった。

片意地を張った私の心のふたを開いた父のひと言は、奥深いところに沈んでしまっていた思いまで、素直に浮かび上がらせてしまったのだ。

この二十年、家庭では、参観日や運動会、長女ときは六年担任をしていたため卒業式でさえ出てやることができず寂しい思いをさせてきた娘たちなのに、いつも変わらず「お母さん」「お母さん」とそばにいてくれたから、お母さんでいながら仕事をがんばれたのだ。

学校では、「でも・しか先生」スタートの至らない教師でも信頼し、キラキラした目と弾ける笑顔を私に向けてくれた子どもたちのおかげで、教師としての夢や希望を抱かせてもらったのだ。今では、こんなに自分に合っている仕事は、これしかないと思っっている。

こんなにやりがいのある仕事なのだ。
ふと、父は、本当は教師を続けたかつたんじゃないかと思つた。

それなのに、家業を継いで慣れない商売の道に入った。若い日の父は、どんな思いで退職の挨拶をしたのだろう。どんな思いで、紙や洗剤等の日用品を得意先に配達していたのだろう。

家や家族のために夢をあきらめたのに私たち子どもの前では、何の迷いもなく今の生活を生きる姿を見せていた父。

もしかしたら、あのとときの涙は、自分が生きることのできなかつた「教師」の道を、娘と共に歩んでくれたからこそその涙だつたのではないか……。

次から次へと湧いてくる思いに、目の前の表彰状は涙でぼやけてしまったけれど、私には確かにそれが、私を支え、補い、励ましてくれた人たちへの感謝状に見えた瞬間だった。

そのとき以来、私も、「がんばるなあ」「がんばるなあ」という言葉を使える自分になろうと思つた。それは、がんばった自分に誇りを抱かせ、そのがんばりは自分一人だけの力ではないことにも気づかせてくれる言葉だと知つたからだ。

しかし、「がんばるなあ」「がんばるなあ」という言葉は、相手のがんばりに寄り添い共感したときでなければ、使えない言葉である。なかなか簡単に使えない言葉が簡単に使える自分になるために、まず、相手のがんばっている姿に気づく自分になるようがんばりたい。